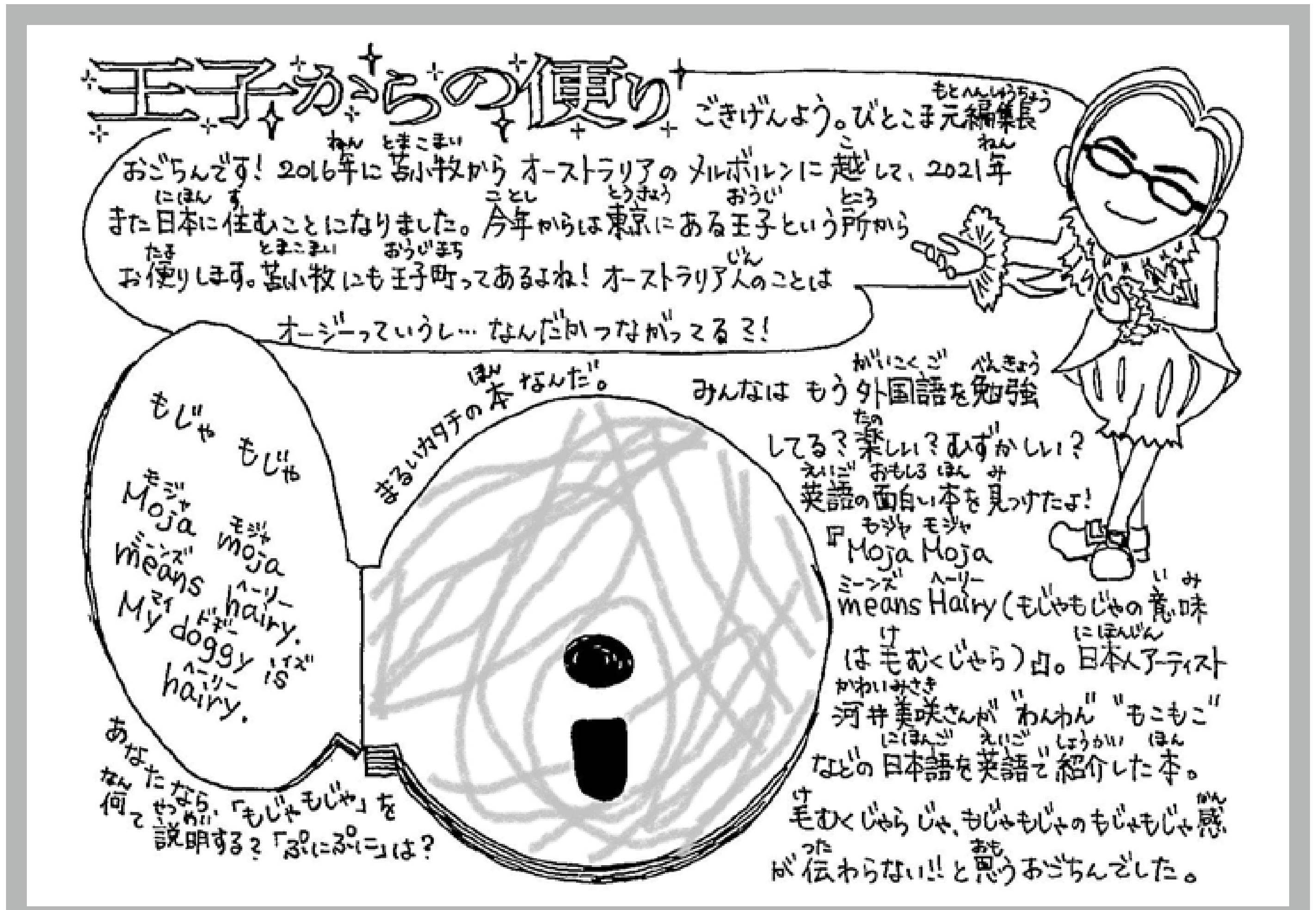



## 編集後記

「びとこま 第１号」は2012年７月に発行されました。それから代々の子ども記者たちに引き継がれ、ついに30号の発行を迎えました。今までの記者さん、今がんばっている記者さん、おめでとうございます！ずっーと一緒に活動してきたので楽しい思い出や印象に残る記事、イラストがたっくさんあって、どの号を見返しても生き生きとした感動が伝わってきます。

30号では、コロナ禍の合間をぬって展覧会を見たり、リモートで作品鑑賞したり、リモートをもっと楽しむ方法を考えたりと、今年ならではの記事が並びました。取材ではいつも楽しみながら好奇心や研究心を爆発させている姿に大人記者たちも励まされていたと思います。記念すべき「びとこま30号」ぜひ隅々まで楽しんでください。


**びとこま** 第30号（2021年11月発行）

【執　　筆】子ども広報部「びとこま」（阿部多香子、植竹湧、ウォーリナー笑生、栗本帆夏、栗本百花、田野紗彩、野本遥、原田詢矢、前原みのり、三浦百葉、森田紗史、綿貫里咲、苫小牧市美術博物館、NPO法人樽前artyプラス）

【イラスト】子ども広報部「びとこま」、小河けい（NPO法人樽前artyプラス）

【紙面デザイン】堀米和克（NPO法人樽前artyプラス）

【編　　集】苫小牧市美術博物館、NPO法人樽前artyプラス

【発　　行】苫小牧市美術博物館（苫小牧市末広町３丁目９－７）



苫小牧市美術博物館の魅力を伝える

# びとこま

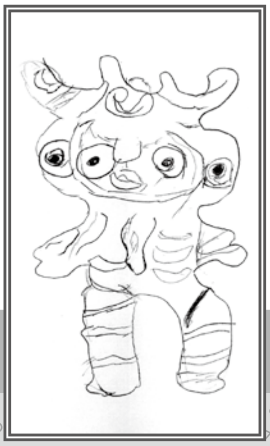
2021 30号

## ミミズク土偶

▲イラスト：阿部多香子

▲イラスト：田野紗彩

▼阿部多香子作（粘土）


▲イラスト：栗本百花

イラスト：前原みのり

## 特別展「発掘された日本列島」

**2021年7月31日(土)～9月12日(日)**

土偶は女性をかたどったものが多く、命の誕生や再生、豊かな恵みへの願いが込められており、祈りや祭りの道具として使われた。男性をかたどったものは珍しい。 **（綿貫里咲）**

土偶は縄文時代ころ、日本で作られていたもので女性をかたどった物が多い。そのため、男性をかたどった土偶はとてもめずらしい。 **（栗本帆夏）**

オンラインだが、はじめて見た「土偶」。ミミズク土偶は、かみの毛がまかれていて、体にもようがかかれていたり、手がくねっとしていたり、注目するとおもしろい発見がたくさんみつかる。見ていると、心が温かくなる。土偶が作られた目てきはまだわかっていない。しかし、心は温かくなるようにと作ったのかもしれない。電気や食料、道具があまりない時代に、これだけのものを作れるとは、すばらしいと思った。 **（田野紗彩）**

千葉県我孫子市 下ケ戸貝塚 ミミズク土偶
頭の部分は結い上げた髪で、耳には耳飾りがある。このことから、女性の土偶であると考えられている。
写真を見ながら実際に粘土でつくってみたら、複雑な形をしていることがわかった。特に頭は、バランスをとるのが難しかった。縄文時代を生きた人々は手先がとても器用だったのだと思う。 **（阿部多香子）**

## アクセサリー

### ◆「耳かざり」

どの耳かざりも片耳分しかないと聞いて、教科書にのっている想像図は両耳ともついていたから、片耳ずつちがう形の耳かざりをしていたのかな、と考えました。うるしやベンガラで色もつけていたので、他には、どんな材料を使って作っていたのか調べてみたくなりました。（野本遥）

### ◆「縄文時代のアクセサリー」

縄文人は、粘土や石、骨などでつくったアクセサリーを身につけていた。これらは、お守りや指導者の権威の象徴、成人の証などでもあったようだ。

（綿貫里咲）

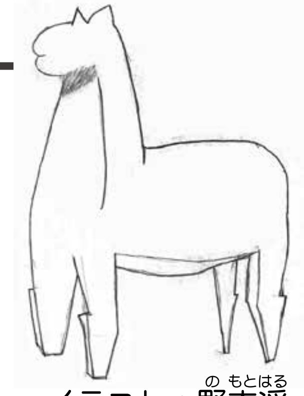
わたしは、なぜこんなかざり物を作るのか、とても興味がわきました。わたしのそうぞうは、昔のおもちゃとか、家にかざる物、また工芸品かなあと思いました。（前原みのり）

8 月 27 日に北海道の緊急事態宣言が始まって、今回の活動はオンラインの開催に変更しました。初めてのオンライン開催でしたが、初めてみんなマスクをしないで集まることができました。これからもみんなで工夫しながら活動を続けていきます！（編集部）

## 土器

### ◆「木製馬」

この馬を見て、岩手県のチャグチャグ馬コと形が似ていると思いました。絵に書いてみると、首と足のバランスや、木をスパッとけずった線を表すのがむずかしかったです。（野本遥）



イラスト：野本遥

今回は、土器や土偶などについていろいろ知った。一つ目は、昔の物にも金ぱくのようなものがはられているという事です。二つ目は、つぼの中にはお金が入っている物もあって、一つのつぼの中に、4,196 枚入っていることがわかった。今回は、オンラインでやったので、きこえにくい所もあったけど、分かったこともたくさんあってよかった。（板谷果穂）

土器はにたきや保存のために使われていた道具、縄文時代、弥生時代と年々土器は変化し、色々な時代で活躍したもの。（栗本帆夏）

・**中世**　ふだん私たちも使っているおちゃわんなどのうつわがつくられる。
・**僧形神立像**　ほりはあさいが深くほられているように見える。これは神様として使われていた。（栗本帆夏）

オンラインの様子

## 『びとこま』リモート開催を考える

今年度からオンライン機材を揃えて、リモートメンバーも増え、子ども記者たちも盛り上がっています。その手助けをしてくれる『BTモンスター』も登場です！オンラインでの活動は、まだまだ課題もありますが、全国のアーティストとつないだり、遠くに住んでいるメンバーとつながったり、これからの可能性にも期待したいと思います！（編集部）

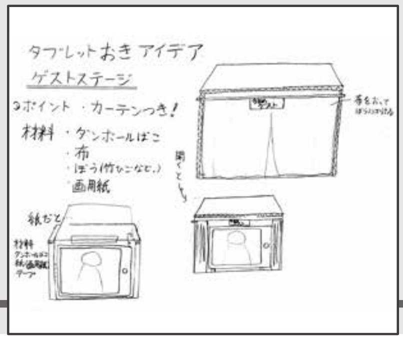
### Q オンライン開催、どうだった？

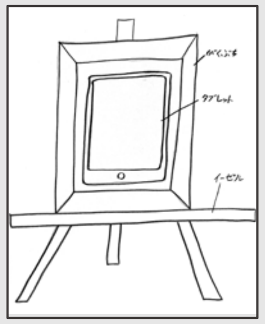
私は便利だけど不便だなと感じました。なぜなら、取材をしている間に、自然に出て来る言葉が言えなくて、きゅうくつな感じがしたからです。（野本遥）

初オンラインで、展示品が見にくい部分もあったけれど、マスクをしていないみんなの顔を見ることができてうれしかったし、チャット欄を読むのも楽しかった！（綿貫里咲）

オンラインでもわかったけど、実物を自分の目で見て観察したかったです。（前原みのり）

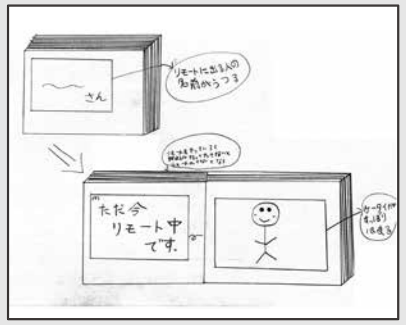
### Q タブレット置きアイデア教えて！





大人記者・おごちんもつくってみたよ！
名前は部員みんなでつけたよ！

『BT モンスター』



### Q リモートメンバーとつながる工夫は？

こんな時代だからやってみたいことは、家のすみにミニ美術博物館をつくることです。たまに、展示替えをしてみると、作るのも見るのも楽しそうです！（野本遥）

どぐうを作ってみたい！どぐうを作ったときの気持ちがわかるかもしれないから。どぐうを発くつしてみたい！すなや土などがついていたら、どうやってはらっているかなどみてみたいから。（田野紗彩）

びとこまメンバーでオンラインでおしゃべりしてみたいです！（綿貫里咲）

## 企画展
# 「コイノボリ大火と苫小牧消防史」
**2021年4月29日［木］～7月4日［日］**

### コイノボリ大火とは？

大正10（1921）年5月1日、日曜日、午後1時20分ころに、三条通6丁目あたりから火災がありました。その時の風速15メートルの北風にあおられて、まちの中心部であった本町、幸町をやきつくし、海岸までもえあがり、わずか2時間半で学校、病院、役場などの主要しせつを含む1,007戸を焼失し、5,350名が被災し、そのうち1名がなくなりました。当時の苫小牧町の人口は、3,897戸、17,285名でした。（三浦百葉）

私は、町の3分の1がなくなるときくと、こわくて、たまりませんでした。それでも、苫小牧消防手たちは、がんばって、このコイノボリ大火を終わらせたのでしょう。苫小牧消防手たちがみんなをひなんさせたり、重い服を着て火を消したりするすがたを思いうかべると、すごいと感動しました。（田野紗彩）

### コイノボリ大火 ～1世紀経っても消えぬ記憶～

大正10年5月1日、端午の節句が近づいたこの日、苫小牧を震撼させる大火がおきた…。

午後1時半前、現在の合同会社大洋社印刷の裏付近で、ストーブの過失により火がおきた。当日の強風により火はあおられ、瞬く間に大火災となった。端午の節句により、空高く泳いでた当時は紙製だったコイノボリに引火。火の玉となったコイノボリは街を襲った。当時の人は、「火はマチをナメるように」と証言しているように、このことからも恐ろしい火の回りを目の前にしたのだと思われる。

消防組は、半鐘が鳴るのを聞き付けたのだろう。主力勢力のガソリンポンプ、腕用ポンプを用い、消火に力を尽くした。しかし、火の手はますます広がり、ついには川をも越えた。それでも力を振り絞り、懸命に消火活動を行った。

午後3時半頃、火は苫小牧の1/3、1,007戸を焼き尽くし、5,350人の人々を悲しみにさそい、一人の人の可能性をうばいとった大火は、ようやっと諦めたようにおさめられた。わずか2時間で、人々はおそろしく街が変わりゆく様を見届けたのであった…

火の回りははやく、その火勢は新聞に「打撃は函館以上」と記される程の範囲と建物を焼き払った。しかし、そんな中でも王子製紙の工場と、当時の輸送の要であった鉄道が被害を受けることなく助かったのは、不幸中の幸いだろう。

義捐金は多くの人々から送られ、海岸に沿う町としての危険性を改めて実感したのであろう。人々は防火に対しての意識をより一層、いや二層三層に高め、備品もより多く、より質の良いものをそろえた。現在の新川通も当時は「中央火防線通り」と呼ばれ、火の回りを防ぐため、広い幅がとられた。

「コイノボリ大火」、北海道の歴史に刻まれるような大火だった。今の技術には驚きを隠せないが、過去の大火を知り、日々の防火意識を高めることが、大切なのではないだろうか。

（原田絢矢）

### 消防道具を見てみよう！
## 消防服 今と昔の違いは？

**昔**

▶

**今**

**昔▸刺子袢纏**

昔の消防の服で、もめんを3重ほどにかさねた服。すきまがあると燃えやすくなるから、すきまを作らないようにがっしりぬっていた。この服は、平均の重さは2kgくらいだが、火事場では、水をかぶった状態で作業するため、重さが2、3倍に増えてしまったそうだ。

今の消防の服も重たいと思うけど、昔はもっと大変だっただろうなと思った。

消防団長は、内側の背中に龍のもようがある刺子をきていた。龍は水の神様だったそうで、他の人には見えないけれど、自分を守るようなためだったのかなと思った。（野本遥）

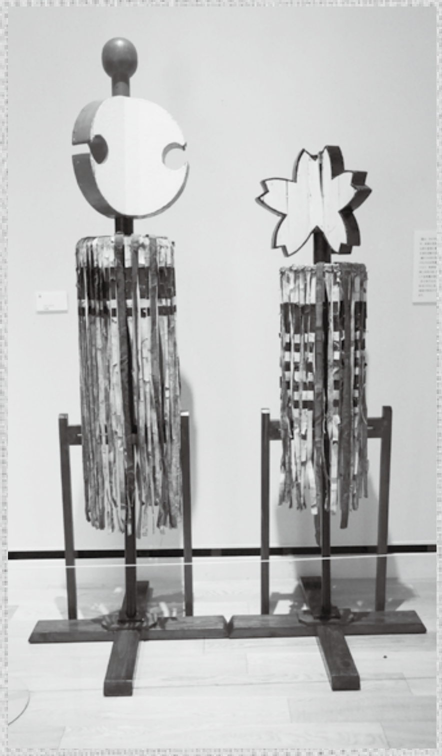
**今▸防火衣**

化学せんいを用い、安全に消火活動が行える。熱や炎に強く、縮んだり破れたりしない。高いところで作業するための安全帯がついている。昔は安全性が低かった。今は燃えにくい素材でできていて安全！（綿貫里咲）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

くらべてみると、〇〇消防本部などがかかれている場所がちがう。昔は前で、今はうしろにかかれてある。（栗本帆夏）

## 纏



それぞれの消防組のシンボルのこと。このひも状の部分を「ばれん」といい、金色のばれん「金ばれん」がついた纏は、ゆうしゅうな消防組のしょうこだそうだ。（野本遥）

「消防道具を見てみよう！」は次のページもつづきます。

## 約100年前の消防道具！

今回見たのは、約100年前に起こった「コイノボリ大火」という出来事に関するものだ。そのころのコイノボリは紙でできていて、みんな外にかざっていた。そのため、コイノボリに火がついて、あっという間に燃え広がり、大規模な火災が起きてしまった。そして、今回紹介するのは、「コイノボリ大火」が起きてしまったころ、実際に消防組で使われていた道具たちだ。

警防団は、火災出動の他、防空演習という戦時中に、消防・ひなん・救護などの訓練や灯火管制という空しゅうをさけるために家の明かりが外にもれないよう制限するなどの指導を実ししていた。そこで鐘つきメガホンという鉄でできた道具が使われた。他にも、火災予防の広報が江戸時代に「火の用心」といいながら拍子木を鳴らして夜回りをしていた。またハンドベルも合わせて使われた。そして、実際に出動する時に使われたのが手動サイレンと赤色灯付モーターサイレンだ。手動サイレンは、消防自動車補助席の外側に付けて、えんぴつけずりのように手動でぐるぐる回してサイレンを鳴らした。赤色灯付モーターサイレンは、消防自動車の前方上部に取り付けた。

**（ウォーリナー笑生）**

中庭展示 vol.16 武田 浩志

## 『TAKEDAsystem vol.10』

**2021年4月29日(木)～9月12日(日)**

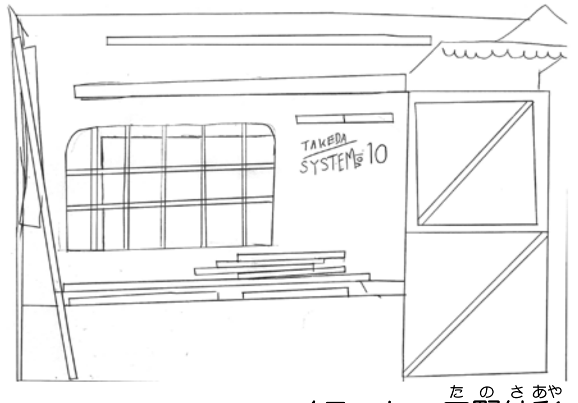
カラフルな小屋。この小屋の中にある、ちゅうしょう画は、とう明な線、なにかを切りとったような形や、グラデーションの線など、いろいろな色やもようが描かれています。

この小屋の中で、わたしはどんなものが描かれているかゆっくり考えたいです。

わたしは、ドアの上の屋根がオシャレで、まどの形も面白いなと思いました。また、ドアの上の屋根の横にカラフルな横ぼうや、たてぼうがかわいいです。

わたしは、このような小屋をいつか作ってみたいです。また、その小屋の中をどう想像して作るのかが楽しみです。**（田野紗彩）**

タケダシステムは、想像していたのとはちがって、ゆかもキラキラ、小屋のうしろまでカラフルでした。タケダシステムというだけあって、他の作品とは何かちがう、そんなふしぎな作品でした。実さいに中にはいった時は、「写真でみていた作品の中にいる！」とこうふん状態でした。他の人の作品を展示しているところをみてみたいです。また、光をあびている作品をみると、とてもかがやいて見えました。**（前原みのり）**



イラスト：田野紗彩

## こんなにいろいろ！消防道具！

今回は、コイノボリ大火と苫小牧消防史というテーマについて学んだ。

一つ目は、鐘つきメガホンです。警防団は、火災出勤のほか、防空演習や灯火管制の指導も実施しています。

二つ目は、拍子木とハンドベルです。火災予防の広報は、江戸時代に「火の用心」といいながら夜回りをしたのが始まりといわれています。拍子木のほか、ハンドベルも使われていました。

三つ目は手動サイレンです。消防自動車補助席の外側につけて、手動でサイレンを鳴らして出勤しました。昭和30年代後半（～1964）まで使われていました。

四つ目は赤色灯付きモーターサイレンです。消防自動車の前方上部に取り付けるモーターサイレンです。今回もいろいろなことを学ぶ事が出来た。消防の時に使われる物なども知ることができた。これからもいろいろな事を学んでいきたい。

**（板谷果穂）**

イラスト：前原みのり

見た目は、小屋や家に見える。中を見ると絵がかいてあるように感じる。小さな小屋だけれども中ではどのようなことが行われているかが気になる、想像がふくらむ作品だと思う。**（栗本帆夏）**

中は、外から見たときよりも広かった。中にある作品は、あざやかなけい光色を使っていて、光っているように見えた。小屋の後ろにもカラフルなスプレーをかけた木がついていて、とてもきれいだった。けい光ピンクにしたそうだ。

作品は、青いシートを30～60そうくらい重ねて作っているようで、遠くでみると、平面に見えても近くで見ると、おくゆきがあったり、でこぼこしていた。ゆかにもラメがついていたり、見えづらいところもカラフルだったりして、細かいところまで、気をつけてみると、とてもおもしろかった。**（野本遥）**

私はこの作品を見て、この作品の作者の武田さんが作品を作る部屋（アトリエ）をイメージしているのかなと思った。武田さんがカラフルな作品を作っているところなんだと思う。私なら、この部屋で絵を見ながら友達と遊んだりしたい。この部屋にいると、楽しい気分になれそうだと感じた。**（綿貫里咲）**